〈青森県史〉の窓 71

下北の祇園 ～田名部の歓楽街～

中園 裕
（県民生活文化課 県史編さんグループ 主幹）

田名部の柳町。1959（昭和34）年5月4日撮影
「山田秀三文庫」＝北海道立アイヌ民族文化研究センター所蔵。
本町と並ぶ商店街で、山田秀三も
「中々明るいしっとりした街だ」と述べている。

むつ市の田名部地区は藩政時代から下北半島の中心地である。そのため1899（明治32）年、下北郡内で最も早く町制施行を遂げた。近隣する大湊地区は海軍の街としての歴史を持ち、今も海上自衛隊が駐屯している。

1921（大正10）年、海軍の施設ができた大湊村に大湊鉄道（後に国鉄大湊線）が敷かれた。だが大湊鉄道の田名部駅は現在の赤川駅に置かれたため、同駅から田名部町の本町と柳町まで軌道馬車が敷かれた。トロッコ幅の路線上を、一頭の馬が木製の客車一両を引くものだ。蒸気機関車が走る大湊鉄道とは対照的だった。

1928（昭和3）年、海軍の街として町制施行を遂げた大湊町は、昭和戦中期に軍需産業の影響で爆発的に人口が増えた。しかし海軍施設があった理由で敗戦前に空襲を受けている。これに対し田名部町は空襲されず、戦後復興も大湊町より早く成し遂げた。

歴史的に対照的な田名部・大湊両町が、昭和の大合併で紛糾したのも無理はなかった。新市の名称をめぐり下北市か大湊田名部市で揺れ動き、首相の合併勧告までなされて大湊田名部市が成立。翌年には、むつ市と改称し全国初のひらがな市となる。田名部の本町や柳町と大湊駅周辺の商店街は、大勢の市民が買い物や飲食に集まり活気を帯びた。

だが高度経済成長に伴う自動車社会の進展で、下北駅北方の田名部川河口付近に郊外型の大型ショッピングセンターが建設され出した。駐車場が少ない田名部・大湊の商店街は敬遠された。半島内の道路が整備拡張されるにつれ、下北各地の鉱工業に従事する人々が田名部地区に住み込むようになった。平成の大合併で、むつ市と合併した大畑町・川内町・脇野沢村の行政施設は整備縮小。各商店街が急速に衰退し始めている。対照的に田名部川河口付近は下北半島の台所となった。夕方近くなると、周辺の道路は自動車で大混雑する有様である。

下北の台所とは対照的に、田名部の歓楽街には田名部川が静かに流れ、昭和戦前期に架けられた大橋がたたずんでいる。田名部川に注ぐ明神川沿いには田名部神社や常念寺がある。その周りには○○通り、△△横丁と名付けられた小さく個性的な地元の居酒屋とスナックが並んでいる。歴史的建造物と長屋風の飲食店が調和を保っている様子は、まさに「下北の祇園」である。

地元の人には平凡に見える歓楽街も、よそ者から見れば興味深い場所。チェーン店に押され個性のない昨今の歓楽街と比べれば、「下北の祇園」は他にない魅力がある。むつ市民はそのことに誇りを持ち、市外の人や観光客に価値を伝えて欲しい。市民や観光客が一体となって「下北の祇園」で飲み、食い、楽しみ、大いにお金を流通させることが、下北振興の始まりになるのである。